

発刊のことば

隅谷調査団団長 隅谷 三喜男

成田空港問題は、その出発点から数えると今年はちょうど三十年目である。政府が千葉県富里に国際空港を開設する方針を内定したのは、一九六五年であった。それが富里における反対運動によって、翌六六年に、予定地がにわか隣接の三里塚に変更になった。その間の事情について十分な説明も説得もなかったため、地域住民の中から反対運動が起こり、予定地測量をめぐる機動隊との衝突さえ見られるようになった。折しも七〇年安保闘争の大波が重なり、その後二十五年間、死者五名を出す激しい紛争が続くことになった。

混乱の中で滑走路一本が完成し、七八年には何とか成田空港は開港に漕ぎつけたが、その後も反対闘争は激化する一方で、空港周辺地域の発展は阻害され、土地を離れる農民も少なからず現われ、空港の能力も限界に達した。この事態を解決すべく実現したのが、成田空港問題シンポジウムであった。それは民主的な討議方式を確立すべく公開の原則を厳守し、農民と運輸省・空港公団が対等の立場で論議する場とし、学識経験者五名（隅谷調査団）が調停に当

たることとなった。

シンポジウムは九一年十一月に第一回を成田で開き、以後ほぼ毎月一回、成田あるいは芝山で開かれ、二十五年にわたる闘争の経緯を一つ一つ確認しながら、議論を進めた。土地収用法による事業認定の失効をめぐる激しい討議も行われ、隅谷調査団の所見を認めることによってこの峠を乗り切り、代執行をめぐる緊迫した状況から、開港前後の力と力との対決が詳細に説明され、反対同盟からは空港行政への厳しい批判やこれに対する当局の反省的回答も聞かれた。こうして九三年四月の第十四回で反対同盟から、収用裁決申請の取り下げ、二期滑走路建設計画の白紙還元、今後の空港問題を討議する新しい場の設定の三提案があり、翌五月の第十五回のシンポにおいて、反対同盟の三提案を基礎として隅谷調査団は最終所見を発表し、運輸省・空港公団、千葉県、反対同盟の関係組織全員の賛成を得、シンポジウムはその任務を終了した。

このシンポジウムの特徴として、次の諸点をあげることができよう。第一は関係者の良識ある対応によって成果を

あげることができたことである。とくに、反対同盟が長年にわたる憤懣や感情を抑え、国側の対応をそれなりに評価したことによって、両者の間に次第に信頼関係が形成されてきたことは特筆されてよい。第二は対立する両者の主張を足して二で割るといような形で妥協し終結させるという道をとらず、双方の主張、見解を十分に聞いたうえで、社会的公正の視点に立つて結論を導き出したことである。

第三は今後、農民、地域住民と運輸省、空港公団、千葉県が対等の立場で話し合い、空港を中心とする地域のあるべき姿について構想を論じ描き出すことになったことである。

このシンポジウムの成果は成田空港問題解決の新しい場、すなわち円卓会議に引き継がれたが、深刻な力と力の対立、農民と当局との相互の不信が解消され、民主的な対話によって問題が解決されることを示したのである。この間、反対同盟の農民達の努力とその姿勢には称賛すべきものがある。農民闘争における意思統一には労働組合運動や市民組織の運動とは本質的に異なる困難がある。その困難を乗り越えて終結を見たのである。他方、運輸省の姿勢と努力にも敬意を表するにやぶさかでない。官庁は一度決定し、実施に踏み切った措置について、反対運動のゆえにその行きすぎを反省し、計画を変更することはこれまで無かったと言ってよい。成田空港問題では一つの新しい歩みを示した。

このような事態の中で、周辺地域の雰囲気にも大きな変化が生じた。

これによって、空港建設のあるべき姿を指し示すだけでなく、日本の民主主義の進むべき道は如何にあるべきかという問いを、日本社会に投げかけたと言ってよいのではないかと考える。

このような経緯は、日本社会の今後の歩みのためにも、一つのサンプルとして記録を残すことは意味なしとしないであろう。そこで地域振興連絡協議会は、成田問題の今後の展開のためにも、更には広く日本社会全体のためにも、この三十年に及ぶ歴史的資料を収集し、記録集として残すことを決意し、隅谷調査団として問題処理に当たられた一人である山本雄二郎氏を責任者として依託し、本記録集を編纂されたのである。その労を多とし、感謝すると共に、これが関心を持つ多くの人に読まれることを願って止まない。

なお、円卓会議についても、記録集の作成を進めており、近く公刊する予定である。

一九九五年三月